

六朝の文学用語に関する一考察

——「隸事」をめぐる——

福井佳夫

一 隸事とはなにか

本稿は、六朝の文学用語のひとつ、「隸事^{れいじ}」について、その実体や文学史上での意義をかんがえようとするものである。

この「隸事」という奇妙な語、いったいどういう意味か。

鈴木虎雄『駢文史序説』（研文出版 二〇〇七）は、修辭技巧の典故を説明した箇所¹で、このことばに言及し、つぎのようになっている（一二七―一二八頁）。

典故とは「古典に存する言・事」をいふ。支那の学者は、言・事を共に「用典」などといひ、二字合して一義の如く使用すると雖も、「典」は「古典に存する言」をいひ、

「故」は「古典に存する事」をいふものとして之を区別するを宜しとなす。以下、古典に存する言を「古言」といひ、古典に存する事を「故事」と称すべし。故事を使用することを又、「隸事」などと称す。（隸とは奴隸として使役する意）

この説明によると、「隸事」は「故事を奴隸として使役する 故事を使用する」の意であり、詩文中で故事をつかうことをさすらしい。訓読すれば、「事を隸^{しにが}わす」だろう。

ただ私見によれば、この説明は、近現代の文学評論の分野では適切だが、このことばが発生した六朝においては、ふさわしくない。六朝ではこれとはちがう意味で、使用されていたからだ。それは、ある事物に関連した故事を列挙し、その

多寡^{たか}をきそうあそび、つまり一種のしり競争（あるいは、それをおこなう）、の意である。つまり、隸事を「故事を使用する」の意でつかうのは、後代のことであり、六朝のころは、故事を列挙するあそびの意だったのだ。したがって本稿でも、この語を「ものしり競争」をおこなう」の意で使用することにしよう。

では、この隸事の語は、いつどうやってうまれたのか。それは、はっきりしている。斉の政治家であり、学者でもあった王俟（四五二―四八九）が、とあるあそびをおもいつき、それから、この語は発生したのである。

王諶の叔父の王摛^{おうち}は、博学で有名だった。

尚書令の王俟は、かつて才学の士をあつめた。そして虚実さまざまの「書物中の」故事を検討して、各事物を類別し、その「類別した」語のもとに関連する故事をならべさせ、これを隸事と称した。隸事は、これからはじまったのである。

王俟はあるとき、賓客たちにこの隸事をさせ、故事をたくさんおもいついた者に、賞をとらせることにした。「隸事が進行して」みな故事をおもいつかなくなったが、

廬江の何憲だけはおもいつけたので、勝ちとなった。そこで王俟は彼に、五花「模様の」の座ぶとんや白扇をあてたのである。何憲は「拝領した」座ぶとんにすわって白扇を手にもち、はなはだ得意そうであった。

そこへ王摛がおくれてやってきた。王俟は提示された故事「をしるした紙片」を王摛にしめし、「そなたは、何憲が手にした座ぶとんと白扇をうばいとれるかな」といった。王摛は筆をとるや、いっきに「あらたな」故事をかいた。その文は深奥で、行文も華麗そのものだったので、一座の者はみな激賞した。そこで王摛は、左右の者に命じて何憲の座ぶとんをぬぎとらせ、みずから「何憲が手にしていた」白扇をうばいとった。そして馬車にのってかえっていった。

王俟はわらっていった。「莊子大宗師の」大力の者が背おって、かえっていった、というやつじゃな」と。

諶従叔摛、以博学見知。尚書令王俟嘗集才学之士、総校虚実、類物隸之、謂之隸事、自此始也。俟嘗使賓客隸事、多者賞之。事皆窮、唯廬江何憲為勝。乃賞以五花簾、白团扇。坐簾執扇、容氣甚自得。摛後至、俟以

所隸示之 曰、「卿能奪之乎」。摘操筆便成、文章既興、
 辞亦華美、拳坐擊賞。摘乃命左右抽憲簞、手自掣取扇、
 登車而去。俟笑曰、「所謂大力者負之而趨。」（『南史』
 卷四九）

これが隸事、すなわちものしり競争がはじまった由来である。

右の文のうち、「総校虚実、類物隸之」二句が、隸事のじつ
 さいを説明したものだろう。しかしこの二句、語句が抽象的
 で、意味がとりにくい。私は、この二句を「虚実を総校し、
 物を類して之を隸^{るい}わしむ」と訓じて、右のように訳してみた
 が、この訳文でよかったのか、いささかこころもとない。以
 下、私の読解について、多少の解説をくわえておこう。

この二句のうち、まず下句「類物隸之」は、具体的にどう
 することというのか。私は、「事物を類別し、その類別した
 語のもとに関連する故事をならべる」の意だと解した。

たとえば、「天」であつたら、天の概念が包含する範囲を
 規定して（たとえば、日月や雷、霧などは「天」にふくめる
 が、寒暑や空、気などは除外するなど）、他の事物とわかれ、
 そのうえで天関連の故事を提示する。つぎに「地」であつた

ら、地の概念が包含する範囲を規定して、他の事物とわかれ、
 そのうえで地関連の故事を提示する。つまり、ある語がさす
 範囲をきちんと規定し（類物）、そののち関連した故事を列
 挙してゆく（隸之）——これが、「類物隸之」の具体的な内容
 だろうと解した。

上句「総校虚実」のほうは、それ以前のプロセスをさすの
 だろう。つまり、参加者全員で虚実さまざまな「書物中の」
 故事の真偽を検討する、具体的には書物を点検して、信頼で
 きるものを選択しておく（信頼できぬ書物や資料を除外する）
 作業をさすとかんがえる。したがって、「総校」は検討する、
 「虚実」は書物や「そのなかにふくまれる」故事の真偽、の
 意と解するわけだ。以上が、私なりの二句の理解である。

ところで、かくみてくると、この二句「総校虚実、類物隸
 之」の段階は、あそびというより、むしろ、故事の勉強会の一
 とき、学問的色彩をおびた集まりだったろうと推測される
 （その意味では、類書の編纂作業にもちかかったろう）。だか
 らこそ、そこにつどつひとは、才学の士ばかりだったわけだ。
 当初は、そうした故事勉強会ふうの作業を、隸事とよんでい
 たのだろう。

ところがこの作業は、すぐあそびに変化してしまった。王儉は、こうした作業をくりかえすうち、隸事は勉強になるだけでなく、たのしいあそびにもなりそうだ、と気づいたのである。

そこであるとき王儉は、「天」や「地」などの事物を、賓客たち（みな才学の士である）に順に出題し、しるところの故事をあげさせた。具体的には、「天」や「地」などかいたボードを各所にかかげ、その下に故事をかきつけた紙片（記名）をならべさせたのではないか。そして故事をもっともおおく提示した者を勝者とし、賞品をあたえたのである。

二 ものしり競争

この時点、つまり王儉が賞品をあたえた時点で、隸事は故事の勉強会から、あそび（ものしり競争）へ変化したといつてよい。そして六朝では、「勉強会でなく」このあそびとしての隸事が、ひろまっていたのだろつ。つまり隸事は、「故事勉強会 ものしり競争（以上、六朝） 故事を使用する（後代）」と変化したわけだ。

もうひとつ、隸事に関する話柄をあげよう。

王儉は、学士の何憲らをあつめ、さかんに故事の多寡をきそつていた。陸澄は、王儉らが故事をだしくすのをまち、そのあとで、もれおちた故事数百十条をかたつた。それは、だれもしらぬ話柄だったので、王儉らは、すっかり敬服したのだつた。

王儉は尚書省において、巾箱や几案のなかから、服飾の類をとりだした。そして学士たちに隸事をさせ、故事をたくさん提示した者に、それをあたえた。学士らはそれぞれ、一二の品を手にいれた。ところが陸澄がおくれてやってくるや、みながしらぬ故事を、各事物に対し数条ずつ提出したのである。そして学士らがもっていた品をうばつて、かえつていったのだつた。

「王」儉集学士何憲等、盛自商略。「陸」澄待儉語畢、然後談所遺漏数百十條。皆儉所未覩、儉乃歎服。儉在尚書省出巾箱几案雜服飾、令学士隸事、事多者与之。人人各得一兩物。澄後來、更出諸人所不知事、復各數條、并旧物奪將去。（『南史』卷四八）

この話でも、王儉が中心となつて、隸事をおこなっている。

彼自身、博学で大の読書好きだったし、また朝廷の高官（尚書令）でもあったので、おのずから領袖的立場についたのだらう。ここでは、陸澄という学者が、隸事の勝者となっている。賞品の服飾の類などは、たいして価値のあるものではない。ただ、それを手にいれることが、当時ではたいへん名誉だったのであり、だから史書にも、かく記述されたのだらう。

このものしり競争、たしかにおもしろそうだ。右の二話をもとに、いささが想像をくわえながら、隸事のようすを具体的に再現してみよう。

会場は、王侯が令をつとめる尚書省の一室。あつまつた参加者は十人ぐらいか。みな、すこし緊張きみである。会場の隅や端には、おおぜいの観客、つまり親族や門生たちもあつまっている。さっそく隸事がはじまった。

まず、審査委員長の王侯が中央にでて、この日のお題を発表する。このお題をきくや、参加者は、さっと筆と紙片を手にとった。

みな、最初はサラサラと調子よく故事をかきつけていた。が、やがて囊中の蘊蓄がつきたのだらう、ウンウン

と苦吟しながら、紙片をにぎりしめるだけ。それをじつとみつめる観客たち。声援をおくるのは禁止だ。やがて全員が完了のサインをだし、隸事が終わった。

だが、会場が熱気をおびるのは、これからだ。

まず、王侯が審査委員をしたがえて、中央にでてきた。審査がはじまったのである。参加者や観客のまえで、審査員全員で紙片を点検してゆく。だが、どんな故事をいくつかきつけたのか。王侯たちは、いちいち紙片をひるげ、かかれた故事を慎重に確認し、点検してゆく。ときに協議のうえ、ボツになった紙片もある。はらはら、ときどき、そしてわくわく。審査員が一挙し一動するごとに、観客たちの熱気や興奮は、いやましてゆく……。やがて審査がおわった。結果の発表だ。ざわざわしていた会場内が、一瞬しずまりかえる。王侯の口から、勝者の名がつけられた。わきおこる歓声、ため息、そして賛美の声。

そして彼が提示した故事が、いちいちよみあげられる。その勝者はなんと、百条あまりの故事をかいたという。やがて読みあげがおわった。すると勝者のまわりに、大

勢の観客がつめかけた。おめでとう、すごいぞ、ばんざい——。

これが、架空の隸事のようすである。すこし演出がすぎたかもしれない。とはいえ、規模の大小こそちがつても、当時、これと同種の悲喜や興奮が、くりかえされたのではないか。かくして、賓客や才学の士たちはもちろん、その取りまきたちも、この隸事に熱狂するようになり、やがて何憲や王擢、陸澄のようなものしりが、名声を博するようになったのだらう。

王侯がはじめた隸事のおそびは、彼の死後も、六朝文人たちのあいだで流行していった。彼のあとをついで、隸事のブームになったのが、かの梁武帝であった。

武帝はいつも周辺に文人をあつめて、経史に関する問題を課していた。范雲や沈約らはみな、主君の苦手な分野をださず、得意の分野を話題にしたので、帝はよろこび、ほうびをあたえていた。

たまたま帝が錦被を出題したところ、みな「もうこれ以上はおもいだせません」とこたえた。そこで帝は、劉孝標をよんでたずねてみた。孝標はそのとき貧窮し、無

官の身だったので、紙筆をもとめるや、「錦被に関する」記事を十余条もかきつけた。これに座中の客人はおどろき、帝もおもわず顔色をかえたのだった。

武帝はこのことから劉孝標をきらうようになり、ふたたび引見しなかった。

武帝每集文士策経史事。時范雲、沈約之徒皆引短推長、帝乃悅、加其賞賚。会策錦被事、咸言已罄。帝試呼問〔劉〕峻、峻時貧悴冗散、忽請紙筆、疏十余事、坐客皆驚、帝不覺失色。自是惡之、不復引見。（『南史』卷

四九

この話をよむと、梁武帝は隸事のおそびを主催し、出題するだけでなく、自分でもこれに参加し、知識の多寡をきそつていたようだ（ただし、ここでは「隸事」の語はつかっていない）。范雲や沈約は、おとなの態度でもって、武帝に勝ちをゆずっていた。だが、貧寒にくるしんでいた劉孝標は、そうした余裕ある態度をとることができず、武帝に恥をかかせてしまった。そのため、彼は武帝の不興をかってしまい、二度と引見してもらえなくなってしまったのである。こうしてみると、隸事は、たんなるおそびではなく、そのひとの名声

や立身にも、かかわってくるようなビッグイベントだったの
だろう。

それにしても、こうした武帝の熱中ぶりは、現在の時点からみると、いささかおとなげないほどだ。この隸事のおそび、名君たる武帝をして、これほど夢中にさせてしまつほどの、おもしろさを有していたのである。知識の博大さをきそつた当時では、この隸事で勝者になることは、「天子でさえ」たいへんうれしく、また名誉なことだったのだろう。

この種の話柄は、ほかにも存するが、挙例はここまでにしよう。こうした故事の数をきそい、ものしりを自慢する当時の風潮については、中国の何詩海「齊梁文人隸事的文化考察」(『文学遺産』二〇〇五 四)のち大幅に増補して、同氏『漢魏六朝文体与文化研究』(北京大学出版社 二〇一一)に収録)が関係資料を網羅して、たいへんくわしい。私も本稿を草するにさいし、この何氏の詳細な考察に多大の便宜をこうむっている。

三 典故から詩句へ

こうした隸事の流行は、背景に、詩文における典故(古言+故事)多用の風潮があることはいうまでもない。典故多用の風潮については、たとえば梁の鍾嶸が、

顔延之と謝莊は、煩雑な典故技法を駆使し、当時の文人はそれに影響されてしまった。その結果、宋の大明(四五七~四六四)と泰始(四六五~四七二)のころは、詩歌は他の書物からの抜きがき同然になった。最近では任昉や王融らが、表現に獨創性をたつとばずに、新奇な典故をきそいあつたため、以来、文人たちのあいだでは、その風がならわしとなつてしまった。

顔延謝莊、尤無繁密、於時化之。故大明泰始中、文章殆同書抄。近任昉王元長等、辞不貴奇、競須新事。爾來作者、寢以成俗。

とかたるとおりである(『詩品』中序)。つまり鍾嶸からみれば、詩文は、典故を多用した結果、他の書物からの抜きがき同然のものとなつてしまったのだ。かく「鍾嶸らの」一

部の文人から批判をうけながらも、それでも顔延之や謝莊、任昉、王融らは、絢爛な典故技巧を駆使することによって、詩名をたかめていったのである。

ところで、かく詩文に典故を使用するためには、たくさん
の書物をよんで知識、具体的には故事や掌故を頭脳にたくわえておかねばならない。当時は、文会場で詩を応酬しあっていたので、自宅にかえって書物をめくるようではラチが
かない。そのときその場で、すぐ典故をおもいうかべ、それをサツと詩句に変換（あるいは詩中に象嵌）せねばならないのだ。その意味で隸事と詩作とは、典故使用を媒介として、ふかい関係を有していたのである（そのため後代では、詩中で典故をつかうことを隸事と称するようになった）。

そうした風潮のなかでは、右でみた王摛や陸澄らこそ、その該博な故事の知識によつて典故多用の詩をつくり、すばらしい詩人だとたたえられたろう、とおもいがちだ。ところが、周知のようにこの両名は、詩人としては無名のままおわつてしまった。故事にくわしい隸事の勝者だったのに、この二人はなぜ詩人として、大成できなかったのだろうか。

それは、隸事が得意だった（故事掌故にくわしい）という

ことと、詩文の名手だということとは、直にはつながらないからである。ここで、右に例示した隸事の場面を、もういちどみてみよう。すると、

「陸」澄は「王」俟らの語り畢るを待ち、然る後に遺漏せし所数百十條を談ぜり。皆な俟らの未だ覩ざる所なれば、俟らは乃ち歎服せり。

「王」摛は筆を操るや便ち、「事を」成し、文章は既に奥辞も亦た華美なれば、坐を挙げて撃賞せり。

「劉」峻は時に貧悴冗散なれば、忽ち紙筆を請い、十余事を疏す、坐客は皆な驚き、帝も覚えず色を失う。

というものだ。陸澄は口頭で「談」じたのであり、王摛は即座に「便ち成」し、劉峻も「疏」（箇条がき）したということに留意しよう。つまり彼らは、隸事の中でサツとおもいついて、しゃべったり、かいたりしたただけなのだ。いわば、メモのような断片的な書きつけにすぎず、陸澄にいたつては口頭の発言であり、そのメモさえもなかったのである。

これでわかるように、彼らは、故事や掌故を想起しただけであり、詩をつくったわけではない。じつさに詩をつくるうとすれば、故事を「談」じたり「疏」したりしたあと、さ

らにそれらを精鍊させ、象嵌させて、詩句を鑄造してゆかねばならない。じつはこの「典故 詩句」の精鍊が、困難なのである。

そこで、この困難な精鍊のプロセスを、すこしだけ擬似体験してみよう。材料としては、さきに鍾嶸が典故多用の詩人として挙例していた宋の顔延之、彼の「（詔に應じて曲水に讌せしときに作りし詩）をとりあげよう。この詩は、元嘉十一年（四三四）に曲水宴が挙行されたとき、宋文帝は臣下に作詩を命じた。その詔に應じて延之がつくったのが、この四言の詩である。ここでは、その冒頭の二句だけをみてみよう。

大道は未形のなかくれひそみ

平和は戦乱のあとに真価がわかる

道隱未形

治彰既乱

この二句は、それぞれ典故をふまえて鑄造されている。では、どうした典故をふまえているのか。さいわいなことに、顔延之が脳裏にうかべていた「とおもわれる」古言や故事が、初唐の李善によって注釈というかたちで、あきらかにされている（『文選』巻二〇）。それによって、この二句の典故をあげてみよう。

道隱未形（道は未だ形るるに隱る）

老子曰、「大象無形」。又曰、「道、隱、無名」。王弼曰、「有形則亦有分、有分者不温則涼、故象者非大象也」。又曰、「夫道、物以之成而不見形、故隱、而無名也」。河上公曰、「道、潛隱、使人無能名也」。

治彰既乱（治は既に乱るるに彰る）

太玄経曰、「乱、不極則治、不形」。賈逵国語注曰、「彰、著也」。

これが、李善が指摘する典故である（詩句とおなじ字句が、注の文にあれば、その字に傍点を付しておいた）。顔延之はこうした典故を脳裏に想起しつつ、「道隱」二句を鑄造したのでろう。

典故の字句と、できあがった詩句とをくらべると、かなり相違しているのに気づく。顔延之は單純に、典故を接合させたのではない。典故の字句を分解し、きりとり、くみかえているし、字句の構造も変化させている。つまり、彼なりに材料（典故）に手をくわえ、精鍊させて、詩句を鑄造しているのである。

まず、下句「治彰既乱」（治は既に乱るるに彰る）のほう

からみてみよう。ここで顔延之は、「太玄経」の「乱不極則治不形」（乱極まらざれば則ち治は形れず）という「レバ則」の構文を、詩では「Aは……にBする」（治は……に彰る）の構造にかえている。これは、そうとうおきな組みかえであり、凡庸な詩人ではなしえぬ変更だといわねばならない。さらに詩中の「彰」字は、典故によれば「形」字にすべきだったはずだ。だが延之は、たぶん鍊字の技巧を意識して、平凡な「形」をさけて「彰」にかえたのだろう。

つづいて上句にかえり、「道隱未形」をみてみよう。この句も典故の字句に、そうとう精練をくわえている。この詩句は、『老子』の「道隱無名」（道は隠れて名無し）をもちいたものだが、出典の「道隱」は、もとは「AはBする」の構造だった。だが、下句の「治彰既乱」（治は既に乱るるに彰る）の構造と対応させるため、顔延之はあえて、これを「道隱未形」（道は未だ形るるに隠る）と変形させ、「Aは……にBする」の構造にしたのである。そして「未形」は、おなじ『老子』に「大象無形」とあるのを利用したのだと、李善は指摘する。

以上、顔延之の詩を例にして、「典故 詩句」の精練プロ

セスをみてきた。これを見ると、延之は、たんに典故の字句を接合させたのではなく、対偶や鍊字の技法を意識しながら、「道隱未形」⇔「治彰既乱」という二句に鑄造しなおしていた。両句とも、典故の文構造を変形させており、そうとう複雑な精練をへて造句しているといつてよい。

なぜ、こうした複雑な精練をほどこしたのか。それはしよせん、延之にたずねないとわからぬことだが、おそらく延之なりに、より美的なものにつくりかえよう（彼の脳裏には、たぶん「対偶＝美的」の意識があつたのだろう）としたからだろう。そうした意欲が、彼の才能であり、また美意識だったのである。

四 陸公は書厨なり

さてここで隸事の勝者、王摛や陸澄らの話題にかえろう。この二人が得意だったのは、右の顔詩の例でいえば、『老子』や「太玄経」の典故を想起し、それを口頭で談じ、また紙にかきつけることだった。つまり典故を提示すること、ただそれだけだったのである。

これを詩にするには、顔延之がおこなったように、典故を精錬し、詩中に象嵌させねばならない。ただ典故を接合させれば、すぐ詩句ができあがるものではない。一句の字数をととのえ（四言詩なら四言に、五言詩なら五言に）、二句ごとに押韻し、ときに対偶にし、また鍊字にも配慮せねばならない。

比喩的にいえば、王摛と陸澄ができたのは、原料たる鉄鉱石（典故）をみつけどすことだけだった。だが詩をつくるためには、それをいったん溶解炉（詩才）にとかして精錬し、うつくしい器物（詩句）に鑄造しなおさねばならない。しかし二人は、知識の獲得には貪欲だったが、そうした詩句への精錬はできなかったようだ。じつさい彼らには、名作とたええられる詩文はのこっていない。二人とも詩と賦は一篇もなく、ただ書翰や議などの文が、残存するだけにすぎない。

では、彼らがのこした文章は、どのようなものか。一篇だけ陸澄「上表自理」を例にあげ、その行文を概観してみよう。斉の建元元年（四七九）、沈憲という男の家奴や門客が、乱暴狼藉をはたらいたが、このとき御史中丞だった陸澄は、これをとりしまらなかった。そこで左丞の任遐は、陸澄は職務

怠慢なので、免官すべきだとうったえたのである。この訴えに対し、陸澄は表をたてまつって、奇妙な弁解をした。自分の職務怠慢にはふれず、「左丞の官にある者（任遐）が、御史中丞（陸澄）をうったえてよい道理はない。だから任遐のうったえは無効である」と主張したのである。

その「上表自理」のなかで陸澄は、得意の博大な知識をふるって過去の故事掌故を列挙し、自説のただしさを論証している。一節をあげれば、

……左丞の江奥は段景文を弾じ、又た裴方明を弾じ。左丞の甄法崇は蕭珍を弾じ、又た杜驥を弾じ、又た段国を弾じ、又た范文伯を弾じ。左丞の羊玄保は又た蕭汪を弾じ。左丞の殷景熙は張仲仁を弾じ。兼左丞の何承天は呂万齡を弾じ。並びて罪に帰せざるも、皆な重効たり。凡そ茲の十弾、差んども是れ「沈」憲「沈」曠の比にして、悉く中丞の議に及ぶ無し。左丞の荀万秋、劉蔵、江謐は王僧朗、王雲之、陶宝度を弾じれども、中丞に及ばず。最も是れ近き例の明らかなる者なり。

という文章である。「某甲は」だった。また某乙もだった。だから「である」というもので、いかにも陸澄がかきそうな

スタイルだ。いわゆる六朝美文ふうの、華麗な文章スタイルではない。つまり彼は、対偶や鍊字などの文飾はほどこさず、ただ故事掌故を列挙してゆくだけの文が得意だったのだろう。いや、もっとつよくいえば、そうした文しかつづれなかったのかもしれない²⁾。

かくかんがえてくれば、やはり二人は、詩賦をつくる才能がとぼしかった、と評されてもやむをえないようだ。

もし弁護しようとするれば、二人は詩賦をつくれたし、じつさいつくったが、運わるくほろんでしまったとか、詩賦をつくる能力は有していたが、偏屈な性格だったので文会に参加できなかった——などといえなくもない。だが、前者については、かりにつくったとしても、後世につたわるほどの名篇でなかった「ので淘汰されてしまった」というべきだろうし、後者についても、二人とも隸事に参加していたのだから、社交性はそれなりにあつたとかんがえるべきである。詩文が残存せぬのは、やはり才能がなかったからだろう。

二人のうち、陸澄にはつぎのような話のこっている。

陸澄は、当世で碩学と称された。だが、『易』を三年よんでも内容が理解できず、『宋書』をかこうとしたが

完成できなかった。だから王儉は冗談で、「陸澄どのは、書物の戸だなのようなひとだな」といつていた。

彼の自宅には古書がおおく、稀覯書もすくなくなかった。彼は地理書と雑伝を編纂していたが、それらは死後になってから世にでたのである。

澄当世称为碩学、読易三年不解文義、欲撰宋書竟不成。王儉戲之曰、「陸公、書厨也。」家多墳籍、人所罕見。撰地理書及雜伝、死後乃出。

これからみると、陸澄が天からさずかった資質は、均等かつオールマイティなものではなく、かなりでこぼこがあつたようだ。彼は記憶力がすぐれ、知識も豊富だったので、具体的で箇条ごとに叙してゆける、地理書や雑伝の類はつづることができた。だが抽象的思弁（『易』のとき思弁哲学）を解したり、大部な編纂物（『宋書』のような史書）を完成したりする能力には、とぼしかったのだろう。そのため王儉から、「書厨」（書物の戸だな）と評されてしまったのだ³⁾。

これを要するに、隸事が得意だということは、ものしりであることの証明にはなりえる。しかし、詩人や文人としての卓越までは、保証してくれないのである。

五 物名詩の創作

ところで詩文、なかでも当時の流行していた五言詩の分野で、この隸事の才が応用できそうなのは、詠物詩や物名詩あたりだろう。

詠物詩（物を詠じる詩）とは、特定の事物をとりあげ、その特徴や風情を叙する詩である。題材としては、草木（たとえば梧桐、竹、薔薇、落梅など）や器物（たとえば席、簾、幔幕、琵琶など）をとりあげることが、おおかった。ただこの詩は、題材と真摯に対峙して、その本質を叙してゆくようなものではなく、文会で仲間ときそいあつてつくる、遊戯的なものだった。あそびの詩なので、気がいたものでなければならぬ。そのため外面的な技巧を追求しがちであり、なかでも題材に関する典故を、詩中におりこむことがもめられたのである。

いっぽう物名詩とは物の名、たとえば宮殿や草木の名を多数よみこんだ詩をいう。これも、やはり数人のひとによって、あそびで競作されることがおおかった。この詩では、事物の

名をよみこむことが主眼なので、典故はかならずしも必須ではない。しかし事物、たとえば個々の宮殿や草木には、それがつくられたいわれや、それにまつわる故事が付随するので、けっきょく典故ともふかい関係を有しがちなのである。

この詠物詩や物名詩では、関連した典故を列挙したり、同種の物の名をおりこんだりすればよい。主題をどう展開するかとか、一篇の構成をどうすべきとか、そんなことはあまりかんがえず、故事掌故の知識を動員し、詩中にならべてゆけばよいのである。

なかでも物名詩の場合は、物の名を列挙してゆくだけなので（ただし、句形をととのえ、押韻する必要はある）、ものしり競争の勝者には好都合だ。いわば隸事のあそび、すなわち典故を列挙してゆく知的作業が、そのまま当該の詩の創作につながりやすいのである。陸澄が苦手とした抽象的思弁や構成力も、ここではあまり問題にならないだろう。

そうした、隸事のあそびをそのまま詩に昇華させた作として、物名詩の一篇をとりあげてみよう。これらの詩、作者の真情や個性はあまり関連しないので、だれの作でもよいのだが、ここでは蕭繹の作をとりあげてみよう。

梁の元帝ともよばれる蕭繹は、たいへんなものしりだった。十四歳で片目をうしなつたが、向学心はおとろえず、配下の者に書物を読誦させて、毎日それに耳をかたむけたという。その結果、博大な知識をものにし、おおくの著述をかきのことした。そうした元帝、詩文の方面では、ものしりだったこともあつて、この物名詩を得意にしていたようだ。じつさい、いまにのこる彼の集には、おおくの物名詩がふくまれている。たとえば、県名、姓名、將軍名、屋名、車名、船名、薬名、獣名、鳥名、樹名、草名などをおりこんだ詩である。

ここでは、そうした物名詩のなかから、宮殿の名を列挙した「宮殿名詩」をしめそう。

杏樹のあいだで花はあかく色づき	杏間花欲燃
竹の道に露がはじめておりた	竹径露初圓
鶏を東道でたたかわせ	鬪雞東道上
馬を北場ではしらせる	走馬北場辺
合歡の花は夜の巷にさき	合歡依暝巷
蒲萄は陽光にむかつている	蒲萄向日鮮
旗亭にて張放の姿をさがしとめ	旗亭覓張放
香車で董賢どのお迎えする	香車迎董賢

きつと天淵の水に邪魔されて
定隔天淵水
相手を思慕して夜ねむられぬだろう
相思夜不眠

陳志平・熊清元『蕭繹集校注』（上海古籍出版社 二〇一八）によれば、傍点を付した字句は、すべて宮殿の名であるという。意外におもわれるが、「鬪雞」や「蒲萄」「董賢」「相思」なども、宮殿や台觀の名なのである。これらの語は、「広義の」宮殿の名でありながら、詩中では、動詞や植物、人名としてもつかわれている。日本古典における掛詞のように、二重の意をかけて使用されているのである（面倒なので精確には訳さなかったが、末句などは「相思觀で相手を思慕して夜ねむられぬだろう」の意になるわけだ）。詩中で宮殿名の語を多用しようとするれば、こうした掛詞ふうにせざるをえないのだろう。

この詩中にふまえられた典故をあげれば、つぎのようなものだ。それは、

【鬪雞】曹植名都篇曰、「鬪雞東郊道、走馬長楸間」。
【走馬北場】曹丕与朝歌令吳質書曰、「馳騁北場旅食南館」。
【合歡】嵇康養生論曰、「合歡蠲忿萱草忘憂」。
【蒲萄】漢書西域伝曰、「漢使采蒲陶、目宿種歸」。
【旗亭】

張衡西都賦曰、「旗亭五重俯瞰百隧」。**【張放】**漢書張湯伝曰、「**張**」放為侍中中郎將、監平樂屯兵、置莫府、儀比將軍。与上臥起、寵愛殊絶、常從為微行出游、北至甘泉、南至長楊、五苑、鬪雞走馬長安中、積数年」。**【相思夜不眠】**古詩十九首曰、「迢迢牽牛星、皎皎河漢女。纖纖擢素手、札札弄機杼。終日不成章、泣涕零如雨。河漢清且淺、相去復幾許。盈盈一水間、脈脈不得語。」などである。これは、右の「校注」にもとづき、私が気づいた範囲で、すこしおぎなつたものである。おそらく、まだ落ちがあるだろう。

このように物（ここでは宮殿）の名をおりこみ、また典故を多用した詩が、物名詩なのである。この詩、宮殿名をおりこむのが目的なので、一篇の主題というべきものはとくになさそうだ。したがって全体の意味も、あまり判然としない。この詩でいえば、前半では曹兄弟や建安文人たちの風雅なあそびを、えがくようにみえる。だが後半になると、いきなり前漢の張放や董賢の典故があらわれる。そして末一句では、なぜか七夕の悲恋の物語が叙されているのである。これらの典故、相互にどういった関係があり、どうした構想のもとに布

置されているのかは、よくわからない。

しかし、これは物名詩である以上、しかたがないといわねばならない。なにしろ、この種の詩は、書齋でじつくり構想したものではなく、文会で遊戲的かつ即興的につくつたものなのだ。宮殿名が出題され、その場で、関連する名称や故事掌故を想起し、それをさつと五言の句にまとめ、押韻させただけなのである。だから、これをつくつたときの蕭繹は、詩の主題とか構想などは脳裏になかつたろう。その意味で、この「宮殿名詩」は、五言詩というより、「物名をおりこんだ五言の韻文」といったほうがよいかもしれない。

物名詩は、こうしたものだ。隸事とおなじく、複数の人びとのあいだで、あそびでつくられるものである。脳裏にたくわえた知識を動員してつくるわけだから、隸事の勝者だった王摛や陸澄が詩をつくとすれば、こうしたあそびふうの詩が、もっともふさわしかっただろう。なかでも王摛は、故事を紙片にかきつけるや、「文章は既に奥にして、辞も亦た華美なり」だったという（前出）。とすれば、王摛などは、なおさらつくりやすかつたろうとおもわれる。

しかし王摛や陸澄には、なぜか、こうした詩ものこってい

ない。物名詩では、ただ想起した典故を、五言にととのえ、押韻するだけでよいのである。そうしたものも残存しないというのは、彼らは、そうしたことすらできなかった（あるいは、しようとしなかった）のだろう。

そうだとすれば、いよいよもって詩才（あるいは、詩への関心）がなかったとしか、いいようがない。彼らは、溶解炉にとかすべき原料は豊富にもっていた。しかし、それを精錬し、うつくしい器物を鑄造する技術（あるいは、意欲）は、もっていなかったのである。

六 創作の三段階

では、王摛や陸澄は、具体的にどんな能力が不足していたのだろうか。いや、二人にかぎらず文学、なかでも詩賦をつくるには、そもそもどんな能力が必要なのだろうか。

そこで、かりに詩賦を創作する過程を三段階にわけ、この問題をかんがえてみよう。この三段階とは、構想をねる「うつつふうにつくるつ」、骨ぐみをつくる「草稿をかいてみよう」、肉づけをする「典故や対偶で洗練させよう」

——の三つである。そしてこの各段階に、それぞれことなる能力が必要だと仮定してみよう。

では、当時の文人たちはこの各段階で、どんな能力をどんなふうにするって、詩賦をつくっていったのだろうか。そうしたことを、江淹「恨賦」の創作を例にかんがえてみよう。この「恨賦」も、やはり典故を列挙した作品である。それゆえ、物名詩と相似した作りかたをしたとおもわれ、いろいろと都合がよさそうだ。

この「恨賦」の序には、つぎのようにある。「私はもともと悲観的な人間だ。「ひとは死をまぬがれぬとおもう」と心ざわいでやむことがない。すると私は、わが想いは過去にとび、恨みをもって死んでいった古人のことを想起してしまうのだ」（於是僕本恨人、心驚不已。直念古者伏恨而死）。これからすると、悲観的な人間である自分（江淹）は、死の運命に心ざわいでやまぬ。そこで恨みをもって死んでいった古人について、その運命をかんがえてみよう——という趣旨で、この「恨賦」をつくったようだ。では「恨賦」をつくるため、江淹はどんな作業をおこなったのか。右の三段階 になわけて、くわしくみていこう。

まず、構想「こういつふうにつくろつ」の段階において、江淹は、「物名詩をつくるのおなじく」恨みに関連した故事を列挙しよう。そしてそれによって「恨み」の情緒を喚起させよう——と構想したようだ。こうした構想は、結果的に成功をおさめた。「恨賦」は『文選』に採録されたし、また「一話また一話と、ひとつずつ故事を叙してゆくやりかたは、読者を慷慨させ、また激昂させる。この文をよめば、英雄だつて涙をながすだろう」(至分段事叙、慷慨激昂、読之英雄雪涕)という好評も、博することができたのである(清の許槿)。許槿は、故事列挙がもたらす「読者を慷慨させ、また激昂させる」効果を、たかく評価したのだろう。

つぎの「骨ぐみ」「草稿をかいてみよう」では、江淹は「恨み」の故事を捜求し、選択し、賦中にしきつらねた。だがそのさい、ランダムに布置するのでなく、「(1)秦の始皇帝、(2)戦国の趙王遷、(3)前漢武帝期の李陵、(4)前漢元帝期の王昭君、(5)後漢の馮衍、(6)晋の嵇康、(7)その他(孤臣・孽子・蘇武・婁敬・栄貴之子)」のように時代順にならべた。くわえて、古人の身分や階層にも配慮した。すなわち史書の構成とおなじで、『史記』ふうにいえば、(1)は天子の本紀、(2)は諸侯の

世家、そして③⑦は個人の列伝というふうに分列したのである。つまり、上は天子から下は無名の士まで、すべての階層をきちんとカバーしているのだ。かく配列することによって、ひとの恨みの情たるや、特定の時代や階層に限定されるのではなく、普遍性をもった感情なのだ——とうつたえようとしたのである。江淹は、こうした趣意を意識しながら、この賦の骨ぐみをつくつたのだと私はおもふ。

最後の「肉づけ」「典故や対偶で洗練させよう」こそ、江淹の得意とする段階である。そしてこれも、卓抜な成功をおさめた。たとえば、やはり清の許槿は、「行文は千錘百鍊されているが、鏤骨の痕跡を感じさせない」(語法俱自千錘百鍊中来、然却無痕迹)と評し、修辭的彫琢の卓絶ぶりをたたえているのだ。

賦中の修辭のうち、典故のくふうは顔延之の詩で紹介したので、ここでは対偶の巧緻さをしめそう。たとえば、嵇康が刑死する場面を叙した対偶、

夕べに濁り酒を手もとにひきよせ
朝がたに琴箏の調べをかなでた

濁醪夕引
素琴晨張

は、「濁醪」⇔「素琴」と「夕引」⇔「晨張」とを対応させつつ、

嵇康の最期の一日を叙したものだ。「濁醪」は、「与山巨源絶交書」の「濁酒一盃、弹琴一曲なれば、志願は畢りぬ矣」に依拠し、「素琴」は「贈秀才入軍」詩の「習習たる谷風、我が素琴を吹く」によったものだ。と李善は注する。ただこの対偶では、むしろ「夕べに引く」と「晨に張る」の対応が、刻々とせまりくる死刑の瞬間を暗示して、じつに巧妙かつ印象的である。嵇康はどんな想いで濁り酒をのみ、琴箏をかなでたのだろうか。その心中は、きつと恨みでいっぱいだったにちがいない——と江淹はいいたいのだろうか。

もうひとつ、こんどは対偶と典故の両方にかかわるくふうをあげれば、

孤臣は涙をボロボロこぼし

庶子はびくびくとしている

「孤臣危涕、
壁子墜心」

がそれだ。この対偶は、孤臣と庶子の不安な心中を叙したものである。李善によると、上句の「危涕」は、「孟子」尽心上の「孤臣と壁子は、其の操心たるや危し」、下句の「墜心」は、王粲「登楼賦」の「涕は横ざまに墜ちて禁められず」をふまえる。すると傍点部は、典拠にしたがえば「危心」「墜涕」となるべきだが、江淹は奇抜な表現をこのんだので、故

意に字をいれかえて、「危心・墜涕 危涕・墜心」と改変したのだという。

以上、私見によりつつ、文学を創作する過程を三段階にわけ、それぞれの段階を「恨賦」によりつつ説明してきた。すばらしい詩賦をつくるには、この三つ、すなわち 構想をねり、骨ぐみをつくり、肉づけをする——の各段階において、それぞれ固有の能力が必要だったろうとおもわれる。

では、この三段階にしたがって、王摛と陸澄の能力をみてみよう。すると二人が有していたのは、骨ぐみをつくる段階の、しかもその「骨ぐみの」材料だけだったといつてよい。つまり彼らは、それ以前の 構想をねることもできず、また骨組みをつくることも、肉づけをすることも、やはりできなかつたのである。そうであれば、そもそもすばらしい詩賦など、つくれるはずがなかつたのだ。陸澄が「書物の戸だな」と評されたのも、その意味ではあたっていたといわねばならない。

このように、詩賦をつくるには、故事や掌故をしっているだけでは、ぜったい不可能だといってよい。や や をさつとこなしでゆく、かがやくような才能がなければならぬ。

六朝の人びとは、そうした才能を「五色の筆」や「五色の鳥」「錦」などに比擬した。著名な話をあげれば、『南史』巻五十九江淹伝におさめられる、つぎのような話柄がそれである。

江淹はわかひころは、文学で名をしられていたが、晩年になると文才がおとろえた。そこでつぎのように噂された。

江淹が宣城太守の任をやめて、「船で都に」かえる途中、禅靈寺の岸边に一泊した。その夜、夢に張協（景陽）と名のる男があらわれ、「私は以前に一匹の錦を^{にしき}あずけた。いま、それをかえしてほしい」といった。江淹が自分の懷中をさぐると、数尺の錦がでてきたので、それをかえた。するとその男、すくおこって、「どうしてこんなにきりとつて、つかってしまったのか」といい、丘遲のほうをふりかえつて、「こんな数尺では役にたたないから、君にあげよう」といった。こののち、江淹の詩はおとろえた——と。

淹少以文章顯、晩節才思微退。云為、宣城太守時罷歸、始泊禅靈寺渚。夜夢一人自称張景陽、謂曰、「前以一匹錦相寄、今可見還」。淹探懷中得數尺与之。此人太

悲曰、「那得割截都尽」。顧見丘遲謂曰、「余此數尺既無所用、以遺君」。自爾淹文章蹟矣。

この話においては、「一匹の錦」が江淹の文学的才能を象徴している。ここでいう「錦」こそ、構想をねり、骨くみをつくり、肉づけをしてゆく、一連の能力をさすのだろう。江淹は、「張協からあずかった」このかがやかしい「錦」をもっていた。だから彼は、すばらしい詩がかけたのだった。逆にいえば、この「錦」をもたぬ者は、いくらおおく的故事をしり知識がゆたかであっても、すばらしい文学作品はうみだせなかつたのである。⁽⁵⁾

七 学者と詩人

だが、こうした構想や骨ぐみなどの話題は、隸事の勝者だった王摛や陸澄には、おそらく「能力があるとか、ないとかいう以前に」関心の外だったのだろう。どうしてか。彼らは、詩賦をつくる詩人ではなく、博覧強記をよしとする学者だったからである。

では、そもそも当時の学者とは、どのような人びとだった

のか。学者一般の例となるかどうかはわからないが、いままでものべてきた陸澄を例にして、当時の学者の人となりや世すぎのしかたをうかがってみよう。

陸澄の人となりをよくあらわすのは、さきに引用した隸事の話柄（『南史』巻四八）の直前にある記述である。そこには、つぎのような話が叙せられている。

王儉は、自分は博学のものしりで、読書量も陸澄よりおおい、とおもっていた。すると陸澄は、その王儉にいった。「わしは、わかい時分からなにもせず、ただ読書ばかりしてきた。かつ年歳も爵位も、たかくなった。ところで、貴殿はわかいのに重職をりっぱにこなし、またいちど目をとせば、どんな書類もそらんじられるそふな。じゃが読書量は、わしにはおよぶまい」。

儉自以博聞多識、読書過澄。澄謂曰、「僕少来無事、唯以読書為業。且年位已高。令君少便執掌王務、雖復一覽便諳、然見卷軸未必多僕」。

以下に、前出の「王儉は、学士の何憲らをあつめ」云々がつづくのである。右の話からみると、王儉と陸澄（四二五～四九四）とは、年齢こそへだたっているものの（陸澄が二十

七歳も年長）、知識の多寡をめぐつて一種のライバル関係にあったようだ。そして隸事のリーダーシップに関しては、王儉が中心にあつて采配をふるっていたが、知識の多寡に関しては、陸澄のほうが一日の長を有していたようである。

それにしてもこの話は、読書量や博覧ぶりに対する、陸澄のつよい自負をよくしめしている。彼はいう。「わしは、わかい時分からなにもせず、ただ読書ばかりしてきた」「読書量は、わしにはおよぶまい」と。つまり陸澄は、高官の「ただし歳わかい」王儉にむかつて、オレは読書量だけはまけんぞ、とタン力をきっているのだ。この発言、読書の多寡がすべてという発想で、年がいもない幼稚なことばだといえ、それはそのとおりだろう。だが逆にいえば、こんなことで、こんなふうにムキになる、鼻っばしらのつよさが、陸澄ら学者の真骨頂だったのだろう。

こうした発言をするだけあつて、陸澄の官場生活は、あまり順調ではなかったようである。トラブルをおこして「白衣領職」（白衣もて職を領す）、すなわち庶民の地位におとされ、かつかつ官位だけ保持したという目に、二度もあっている。

かく死ぬまで圭角がとれず、世渡りがへただった彼の生涯

について、『南史』本伝の「論に曰く」は、

陸澄は、故事掌故にくわしいとたたえられたが、当今では有用な人物ではなかった。そもそも名剣の干将がおもんじられたのは、切れ味抜群だったためだった。だが陸澄の場合は、あまり時務に役だたなかったで、「書物の戸だな」という「王儉の」評言は的を射たものだったといえよう。

陸澄学称博古、而用不合今。夫干将見重於時、貴其所以立斷。於事未能周務、書厨得所譏矣。

と評している。これは、陸澄を名剣の干将と対比しつつ、当今に有用な人物ではなかったと、かなり辛口の評価をくだしたものである。ただし、こうした批評は、陸澄だけでなく、当時の学者一般にあてはまるものなのだろう。

しかし、もし陸澄がこうした批評をきいたなら、つよい口調で抗議したのではないか。なにをいうか。詩才がなかったとか、時務に役だたなかったとかいうだけで、このわしが評価されてたまるものか。時務とか詩才とかいったって、けっきょくのところ、官位の上達をめざすものではないか。そんなことより、読書して前言往行をまなび、君子の道にちかづ

くことこそが、もつとたいせつなことではないのか、と。

陸澄ら、世渡りのうまくない学者は、ほかにもたくさんいたはずだ。そうした人びとの心理を分析すると、おそらくつぎのようなものだったろう。

この世は、「死生 命有り、富貴 天に在り」(『論語』顔淵)だ。死や生というものは、さだまった運命というものがあり、また富も立身も、天の配剤しだい。しよせん人間の力では、どうにもならぬものだ。だから自分は、ガツガツと長命や立身をもとめたりしない。詩賦をつくって立身をねらったり、時務につとめて高位を射とめたりするなど、そんなさもしいことはしとないし、する気もない。そんなことに熱中するより、聖人の道をまなび、徳をやしなつたほうが、はるかに価値があるはずだ――。

陸澄らの胸裏には、読書や博学をおもんじる、彼らなりの矜持があつた。だから、読書や博学の上位に、詩賦創作や時務などがあつて、自分はまだそれに到達していないなどとは、つゆおもっていなかったらう。日々こつこつと書物をよんでゆき、おおくの故事や掌故を脳裏にぎざみこんでゆく。そして王儉らがひらく隸事の場合、おのが博識ぶりを披露し、他

メンバーから賛嘆される——それだけで、彼らはじゅうぶん満足だったのである。

じつさい、故事掌故に詳しいこと、それはそれで、ひとつの能力だった。彼らは、その博識さによつて、当時たかく評価され、名声をえていた。六朝の正史をひもとくと、「博聞多識」「博跋涉該通」「博覽無所不知」「昼夜尋読、未嘗輟手」などのことばが、つねに褒辞として叙されている。日々読書して、前言往行をたくわえ、故事掌故に詳しい彼らは、ただ博識というだけで、尊敬されるにあたいしたのだ。その意味で、王儉が陸澄を「書物の戸だな」と評したとき、おそらくは揶揄とともに、多少の嘆賞もふくまれていたのではないか。

現在の我われは、詩賦がつくれず、時務に役だたなかった陸澄らを、なんとなく、顔延之や王儉などより下位の存在だとみなしやすい。本稿もたぶん、そうした立場から論じてきた。ただよくかんがえてみると、陸澄のような読書や学問に専念してきた人びとを、ただ詩賦創作や時務ができなかったというだけで、無能の役たたずな連中だとみなしてよいかは、かなり疑問だとせねばならない。

当時の六朝貴族たちは、詩賦の創作や官位の栄達だけをめざして、生きていたわけでない。彼らは、詩賦だけでなく、この隸事や書、囲碁、絵画などでも、さかんに腕前をきそいあっていた（さらには、官位をもとめぬ清廉ぶりでも、無欲さをきそっていた）。そしていずれの方面であれ、卓越した能力をもった者は、人びとからもてはやされていたのである。とすれば、詩賦の創作のみ高みにおいて、他の学芸や技能をみくだすのは、我われ文学研究者の偏見なのかもしれない。当時の六朝貴族たちの心性や実態をあきらかにするためには、文学創作の業績だけでなく、より総合的にみつめてゆく必要があるであらう。

注

- (1) 『駢文史序説』は隸事を「故事を使用すること」と説明するが、青木正児『支那文学概説』（全集第一巻三三四頁）には、「隸事とは故事を相隸属して文を作ることである」とある。ほぼおなじ解説だが、厳密にいえば、前者は技法ととらえ、後者は技法＋作文と解していて、微妙に差があるようだ。
- (2) この陸澄の論議は、褚淵が逆の事例（左丞がうったえた事例や、御史中丞が職務怠慢で免官された事例）があることを

論証したので、けっきょくやぶれてしまった。上には上のものしりがいたのだ。そのため陸澄は、庶民の身分におとされてしまったのである。

- (3) そういえば、『文選』に注釈をほどこした初唐の李善も、学識は博大だったものの、文才はふるわず、『書籠』（書物の入れもの）だと評されたという。とすれば、『書厨』（書物の戸だな）とよばれた陸澄も、この李善と同種のタイプの文人だったのだらう。この陸澄、詩文がだめだったとしても、抜群の学識を有していたのだから、隸事などに興じておらず、『李善のように』ひたすら書物の注釈に専念しておれば、文学史上でもっと名声を博していたかもしれない。

- (4) こうした江淹『恨賦』の修辭的技巧については、拙著『六朝の遊戯文学』第十九章を参照。

- (5) 文学創作において、もっとも根幹にあり、大切なことは、構想「こついうふうにつくろつ」の段階よりも、もっと以前に存しているはずだ。それはなにか。心中で「これだ!」とおもいつくこと、つまり靈感（インスピレーション、ひらめき、神来、天啓、着想など）をささずかることだらう。本稿では、「この靈感をささずかったあと、さてどうかいてゆくか」という想定で話をすすめた。そのため、肝腎の「靈感をささずかる」段階にはふれなかったが、この重要な問題については、かつて拙著『六朝の遊戯文学』第十六章で論じたことがある。この靈感の問題に関心のあるかたは、これをお読みいただければさいわいである。